

講演：祈りの形－尼門跡寺院と真宗大谷派寺院に伝わる染織品をめぐって－

中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ

はじめに

モニカ・ベーテ先生は本調査の共同研究者です。元々は尼門跡寺院の染織品を長年研究してきた立場から、今回はそれらと比較しながら真宗大谷派の染織品をとらえていただきました。

荘厳具の目的とつくられ方

繰り返しますが、寺院における染織品には法衣と荘厳具があります。このことは真宗大谷派（浄土真宗）と、尼門跡寺院（臨済宗、真言宗、浄土宗他）でもほぼ同様といえますが、それぞれを構成する要素に違いがあります。

例えば、東本願寺の阿弥陀堂を荘厳する打敷を見てみると、阿弥陀堂は中央の奥にご本尊を安置。周りに金色を巡らせ、豪華で美しい世界を現出しています。この日は「聖徳太子千四百年忌御正当法要」で、浄土真宗においては、こうした特別な法要の際は、前卓とよばれる花立や蠟燭立が載った台に、打敷を掛けて飾ることになっています。

本徳寺で調査した打敷は15枚ありました。その例は、先の調査報告の中でもお目にかけましたが、あらためて1点の打敷をご紹介します。(Fig. 1)



Fig. 1 〈萌黄地八藤抱き牡丹模様 打敷〉 本徳寺蔵

この打敷には以下のような墨書がありました。

「寛政十戌午年二月廿五日 信證院様三百回御忌□ 御法事御□前御打敷 寄進人 廿五日御報謝講中」

信證院は真宗大谷派第8代門首である蓮如上人（1415年～1499年）の院号。その300回遠忌を前に、寛政10年（1798年）に講（檀家のグループ）が寄進したとあります。

この例のように本徳寺の打敷は、遠忌などの大きな法要のために、講が寄進したものがほとんどです。

では尼門跡（臨済宗）の打敷ではどうでしょうか。

まず飾り方。仏壇が三基ありますが、中央はご本尊、左は天皇はじめ皇室の御尊牌(御位牌)、右は開山や中興の位牌です。この構成は臨済宗の尼門跡寺院に共通しており、打敷はそれぞれに用意され、端を重ねて飾ります。

大聖寺では、打敷は特別な法要の日に限らず、毎日の勤めのために、つまり常時掛けています。そして季節によって掛け替える点が、浄土真宗での使われ方とは異なります。

また、形も違います。これらの打敷は正方形で、外側は縁、中は鏡といいます。裏に墨書があることが多いです。



Fig. 2 「為 普明浄院宮（ふみようじょういんのみや） 新皇嘉門院尊儀 御菩提 心浄院殿 御寄附 御寺御所 常 什 文政十三稔庚寅七月」の墨書のある〈紅地繡珍雲立涌に折枝桜模様打敷〉 大聖寺門跡蔵

縁は雲立涌に枝折桜紋様、鏡は立涌に四つ蝶紋様で、いずれも有職文様そのものです。普明浄院宮とは、光格天皇の皇女である倫宮（つねのみや 1820～1830）。文政8年

（1825）に入寺し、まだ得度しない文政13年（1830）に疱瘡により11歳で亡くなります。この打敷は、普明浄院宮の菩提を弔うために、母である心浄院が、我が子の装束を打敷に仕立て直したものでしょう。個人が身に着けていたものを再利用することで、俗が聖なるものへと昇華し、それを飾ることが菩提を弔うことになる、という考え方に因ります。

普明浄院宮のための打敷をもう1点挙げます。



Fig. 3 「文久二壬戌季五月就 普明浄院宮御方三十三回御忌 從蓮観院殿 御寄附」の墨書のある〈緑地綾 鳳凰桐模様と遠山模様打敷〉 大聖寺門跡蔵

文久2年は1863年、蓮観院とは心浄院の出家後の名です。つまり普明浄院宮の三十三回忌に、母が再び寄進した打敷であることがわかります。

基本的なつくりは先のものと同じですが、鏡が遠山袈裟（とおやまげさ 色等の異なる裂地を綴じ合わせ遠山の景色に見立てた袈裟）様のデザインであるのが印象的。遠山袈裟の裂は糞掃衣（ふんぞうえ 不要になったぼろ裂を洗い清め、重ね合わせて縫い綴る）になっており、その針目に母が娘を想う気持ちがあらわれています。縁の紅地の繻珍は、牡丹の花びらに施した暈しから、江戸時代末期、19世紀中頃のものとは推定されます。



Fig. 4 普明浄院宮御方三十三回忌の打敷 鏡部分：糞掃衣方式で縫われている 大聖寺門跡蔵

仏前を飾るその他の染織品としては、斗帳（とちょう 内陣の前に掛けて内と外とを隔てる）や華鬘（けまん 貴人に捧げる花輪を起源とする）があります。



Fig. 5 大聖寺仏前 中央に華鬘、上部及び左右に斗帳が飾られている（発表者撮影）

大聖寺の斗帳には「昭憲皇太后陛下 為御追福 大正三年十一月 高倉寿子 寄付之」との墨書があります。使われているのは雲立涌尾長鳥花丸紋様の白地頭紋紗、夏の礼服用の生地です。これは昭憲皇太后が女官の高倉寿子へ下賜したものを、昭憲皇太后が亡くなったのち、斗帳へ作り替えたものです。

この斗帳の左右には、たいへん豪華な生地（紅地縹子縫取鳳凰桐菊大輪繫紋様）が縫い付けられています。この縹子は殆どの尼門跡寺院に伝わっているもので、明治天皇が卓上で使用している写真も確認されています。

その形状、そして下のほうに房がついているように、これは幡を模しています。幡とは、元は「ここに仏さまがいる」ことを示す幟であった荘厳具です。

また、下の写真(Fig. 6)は最古の尼門跡として知られる中宮寺の昔の本堂です。ご本尊の周りに斗帳、その上に華鬘、柱に幡があります。



Fig. 6 〈写真 中宮寺旧本堂〉 入江泰吉記念
奈良市写真美術館蔵

中宮寺の幡の一つをご紹介します。（Fig.7）



Fig. 7 「藍鼠縮緬地仔狗に雪梅文様小袖裂」の墨書がある幡 中宮寺門跡蔵

使われている生地は「藍鼠縮緬地仔狗に雪梅文様小袖裂」、縮緬地の上に白上げの友禅と刺繍、描絵で雪とたわむれる愛らしい子犬を表したものです。墨書には「尊照榮暉宮御代 寂照光院殿三品羽林普遍靈覺尊儀 為御菩提 天保七丙申年五月二日」とあり、門主である尊照榮暉女王（1792-1845 父は有栖川織仁親王。靈元天皇の曾孫）が、早世した甥のために（子どもの振袖を元にして）つくったことがわかります

さて、話を本徳寺に戻します。幡は同じ形、同じ模様（抱牡丹に石畳模様）のものが色違いで4つ1組としたものがありました。年号は確認できませんでしたが、縮緬の染め物なので、それほど古いものではないでしょう。



Fig. 8 〈萌黄縮緬地抱牡丹御紋 幡〉 本徳寺蔵

この幡と一緒に袈裟が一枚入っていました。



Fig. 9 〈黄唐子色地竜唐花蝦夷錦 前五条〉本徳寺蔵

これは千切屋でつくられたものです。年号は嘉永元年（1848）。蝦夷錦と書いてあるので、背景に貿易関係がうかがえます。五枚縞子地に多色の絵緯、地絡みで、花や龍、幸福を願うさまざまな文様が織り出されています。

このように荘厳具は、浄土真宗では大きな法要に合わせて寄進者（多くは講）が法衣商へ発注するのに対して、尼門跡では、日々の供養のために、故人所縁の寄進された染織品を尼僧達が仕立て直すことがあります。



Fig. 10 〈赤地平金雲菱寄金ハツ藤 輪袈裟〉本徳寺蔵

また、浄土真宗では、得度に際して頂戴する輪袈裟があり、上の輪袈裟(Fig. 10)の墨書には「御輪袈裟 赤地平金雲菱寄金ハツ藤 慶応三年卯九月御得度御當日御頂戴 御用 御装束師 千切屋惣左衛門」とありました。

ここからは、禅宗の尼門跡に伝わる袈裟「伝法衣」について、お話します。伝法衣とは、師匠から受け継いだ袈裟を、高僧が弟子の深い悟りを認め、渡すことで、伝法の正統性の証となるものです。

仏光禅師（無学祖元 1226～1286）の弟子の例について述べます。景愛寺開山如大和尚は無外如大（むがいによだい 1223～1298）の名で知られる尼僧で、仏光禅師は如大和尚の伝法を認めた印として自分の袈裟を渡しました。その袈裟は景愛寺で代々相承されました。二百五十年あまりにわたり伝わり、伏見宮貞成親王（1372-1456）の娘であった慈照尼まで受け継がれました。その後、仏光国師や如大尼の菩提寺である正脈院（眞如寺）におさまり、遠忌の際に飾り、仏光国師や如大禅尼直々のゆかりのものとして、尊ばれていました。

如大の頂相像が眞如寺に伝わっており、柿の蒂紋様の袈裟を身に着けているのが確認できます。柿の蒂紋様は南宋の中国で流行していた文様ですので、如大が受け継いだ伝法衣は、仏光禅師がお持ちになった中国伝来の袈裟であったことが推測できるのです。



Fig. 11 春屋妙葩から智泉聖通尼（曇華院開山）におくられた〈牡丹唐草模様袈裟〉 曇華院門跡蔵

伝法衣以外にも高僧から受け継がれた大事な法衣も尼門跡に残されています。曇華院門跡（尼五山、通玄寺）に伝わる九条袈裟です。(Fig.11)開山、智泉聖通尼(1309-1388)が天龍寺の春屋妙葩(1312-1388)よりその修行を認められいただいた袈裟です。永徳2年

（1382）に、春屋妙葩が長年自分で使用した袈裟の特徴をはっきりと記した譲状とともに代々、曇華院門跡で受け継がれ宝物として保存されてきました。この九条袈裟は萌黄の絹地に紫色の畦の顕紋紗で牡丹唐草紋様です。そしてこの法衣と大変似た紋様が、智泉尼のお像と、後に描かれた頂相画の法衣に見ることができます。

まとめとして

ご覧いただいたように、寺院に残る染織品は仏教そのものといえます。仏の世界を荘厳し、尼僧たちの信仰の象徴でもあります。寺院における染織品には、宗派の違いと年代の

違いもあり、浄土真宗（東本願寺）と尼門跡寺院とではさまざまな違いが見られますが、打敷や幡は多少形が違ってても、荘厳具としての役割は同じです。ただし、それらの荘厳具が人の身に付けたものから再利用し聖なるものに作りかえると別の意味の祈りも含まれます。同じく、法衣も形あるご宝物の中でも、生きておられた方々が実際に身に纏われたお品であり、その方そのものと言えらると思います。宗派の違いはありましたが、後世に保存することの大切さに変わりはなく、理解を深めることと護ることの大切さを知る調査でした。